

地黄湿地と『大阪ウェットランド』

文・写真 服部 倫



地黄湿地観察会(2026.5.30)のハッチョウトンボ 写真提供 (公財) 大阪みどりのトラスト協会

初めまして。4月から正会員になった服部倫と申します。昨年、光文社の〈日本ミステリー文学大賞新人賞〉をいただき、受賞作『大阪ウェットランド』が書店やネットで現在発売中です。本書の重要な舞台のひとつは、大阪府能勢町にある〈地黄湿地〉です。ご存知のとおり、大阪府の生物多様性ホットスポットのひとつです。カバーには水辺で翅を休めるトンボ、また数輪の白い花が描かれています。トンボはもちろんハッチョウトンボ、花はサギソウ。どちらも地黄湿地を象徴する生物です。

私が地黄湿地を初めて訪れたのは2022年の秋口でした。といっても保全活動や観察会ではありません。妻とふたりの単なるドライブです。ふだんは立ち入り禁止なので、柵越しに湿地を眺め、「ここに希少な動植物がいるのか」と思った程度でした。

地黄湿地がミステリーの仕掛けに使えるなと思ったのは、それからかなり経ってからです。生物関係の本を読んでいるうちに、湿地の生物が殺人の動機に使えるそうだと思いますのです。それを背景にして物語を練った結果、受賞・出版に至りました。ありがたい話です。

私はわりと生物好きだと思います。もっともなじんだ生物は海水魚。実家が長崎の漁村にあり、子どものころから魚を釣ったり貝を捕ったりしていた経験が根っこです。大阪に来てからは釣りにハマり、大阪湾でスズキやチヌ(クロダイ)を狙いながら、実家付近の磯や、ときには沖縄まで釣りに行っていました。

それだけならふつうの釣り好きですが、私の場合、魚の分類にもハマりました。狙いの人気魚はそっちのけで、いろんな魚の写真を撮り、とある魚写真のデータベースサイトに登録していました。思い出深い写真をふたつ載せておきますと、実家近くで釣ったホシササノハベラ(右)とアカササノハベラ(左)。

この2種、実はかつて同種とされており、標準和名は「ササノハベラ」でした。子どものころからなじんでいた魚ですが、1997年に2種に分けられ、ホシササノハベラが新種記載されたのです。当時、私もなんとか2種を区別したくなり、ササノハベラ属の写真を撮りまくっていました。

そんなことをしていると、他の生物の分類や生態にも興味が出てくるものです。魚類だけでなく、爬



装幀 bookwall/装画 たけもとあかる/光文社刊

虫類や両生類、昆虫類などの図鑑を購入して眺め、分類学や生態学の教科書なんぞもパラパラめくるようになりました。私は文系上がりなのでくわしいことは理解できませんが、オープンアクセスの論文もときには読んだりしました。

拙著『大阪ウェットランド』には、そんな私の趣味をてらいなく入れました。湿地（Wetland）の定義。学名とはなにか。生物多様性保全の意味。二次的自然の重要性。そしてもちろん地黄湿地のおもしろさ。そういったことを物語のジャマにならない範囲で——いや、多少ジャマになることは承知のうえで盛りこみました。

受賞の連絡をいただいたとき、もちろんうれしさはありつつも、

実は青ざめていました。というのも、本作では実在の地名や施設・団体名をわりと躊躇なく使っているからです。地黄湿地はもちろん、実在の大学名や、名前は少し変えましたが大阪の環境保全団体も出てきます。関係者が読んだらこれ、怒っちゃうんじゃないかな……と。

そして出版後。会長の夏原由博先生からほんとうに連絡がきました。また大阪みどりのトラスト協会や大阪公立大の平井規央先生からもメールをいただきました。怒られるかな……怒られたら謝るしかないな……と思い、ときには実際に謝りましたが、幸いにも好意的に読んでいただき、ほんとうに感謝しております。

また、このたび、大阪自然環境保全協会と大阪みどりのトラスト協会にも入会させていただきました。私のような一介の生き物好きにとって、保全団体は正直やや敷居が高かったので、ほんとうにいい機会でした。

先日は地黄湿地の保全活動や観察会にも参加し、標本でしか見たことのなかったハッチョウトンボの生体を初めて見ました。いろんな話をお聞きしながら、「そんなことを執筆前に知ってたらもう少し違う本になってたよな」と思っているところです。

今後、講座や観察会にもお邪魔させていただきたく思います。拙著ともどもよろしく願いいたします。



ホシササノハベラ (左) とアカササノハベラ (右)